

---

# 誓約異端

桃月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誓約異端

### 【Nコード】

N7903B

### 【作者名】

桃月

### 【あらすじ】

2004年、突如世界に出現した紅い境界線。その境界線に引かれた世界は二つに分けられ、境界線の向こう側の人々は「異端」を身につけてしまう。だが、同時にその対価として大切なモノを失ってしまう事に……。彼方もその「異端」の者達の一人。「ボクは今でも君の笑顔を思い出せない」

## e p o プローグ

3年前、あの蒸し暑い夏の夜の夜に突如、世界に浮き上がった紅い境界線。

世界は二つに分けられ、境界線の向こう側の人達は「異端」と言う能力を身につけてしまう。

だが、「異端」を得ると同時にその対価として、その者の最も大切なモノを奪われてしまう。

向こう側にいたボクも、もちろん「異端」を手に入れ、同時に最も大切な人を失った。

ボクは……。

ボクは今でも、3年前に消えた君の笑顔が思い出せない。

「これはきつと、ボクへの罰なんだと思う」

## e p 1 ブラッドロードの呪い

あの時の事を思い出していた。3年前、あまり詳しくは思い出したくない。

だって、大切な人が失った記憶だったから。

空一杯に広がっていた星空。

辺り一面の綺麗な花畑。

そこには彼女がいて、それが当たり前のように続いていくと信じていた。

まだ、ボク…方枷 彼方が13歳の時だ

地面から、突如浮き上がった紅の線。

それはまさに人の血の色をしていて、だから余計に気味が悪かった。けど……見ているだけで、魅入られてしまう。奇妙な感覚。

紅の線を踏み超えようと一歩……また一歩と足を進める。

そして、遂にその線を超えた。

線を越え終わった後……。

なんだか、急に体に違和感が走った。

今考えると、その時にボクが「異端」能力を手に入れたからだっただろう。

だが、それと同時に傍にいた彼女が……消えてしまった。

それが最大のボクへの罪。

好奇心に駆られて、悪魔のような線を踏み入ってしまったボクへの

……最大級の罪悪。

これはボク“だけ”ではなく、世界の人々を巻き込んだ。

そう、線の向こう側へ踏み越えたモノへ“最高の力”を与え、“最高の贄”を引き渡す取引を。

異端者になった者達の存在は世界では極秘とされ、一般市民には“ただの事件”という事になり、詳細はうやむやになった。

だけど、被害は共通で……。

この紅の線は後の世界で「ブラッドロード」と呼ばれる事となる。

日本にいたボクにとっては、人生最悪の真夏の一日で、絶対に忘れることができない記憶ともなった。

あれから、もう3年が建つ。

癒えない傷を残して、世界はまた以前の通り、元に戻った。異端者達と消えないブラッドロードだけを残して・・・。

眠くなるような授業に目を瞑る。

前では先生が、難しい数式を書いていた。

「ここを……方枷、やってみろ！」

ボクの名前が出る。

なんでボク？

毎回、この先生の授業にボクばかり当てられているのはもう何かの生徒イジメとしか思えないな……。

まあ、寝ているから問題を当てられるのは当然なんだが。授業の内容を聞いていないボクには絶対にわかる訳ない。

「はあ」

うつ伏せていたボクは皆の視線が集まる中、教卓へと向かった。黒板にはさっきも言ったが、まったくわからない数式が書かれてい



る。

だけど、“今のボク”にはこれが手に取るようにわかっていた。

「……x || 2 a r ですか？」

「……正解だ！」

先生は意表をつかれたような顔をしている。

他の生徒も皆ボクに驚いていた。

毎回、この光景を見てしまうと流石に飽きてしまうよな。

さっきの事なんだが……。

ボクは反則をしている。

さっき、教卓へ向かう途中で「誓約を誓う」と小声で言った。

これがボクの“異端”の発動キ！。

ボクの異端……“誓約誓誕”は「物理法則に従った事を誓約でき、その誓約下の中でボクへと誓約内容を与える」といった能力である。だけど、物理法則に従わなければいけないので、「生物を生き返らせる」等はもちろんできない。

ボクの出した答えの正解と共に、授業の終わりのチャイムが鳴る。

「起立！……礼」

6時間目の授業は終わり、これでやっと帰れると思うと楽な気持ちになった。

まあ、簡単に言えば学校自体がかったるい。

そう、ボクはなんでもかんでもかったるいと片付けてしまっ、極度のめんどくさがりだ。

自分で言っのもなんだが、これだけは誰にも負けないと意地を張れる。

もちろん、無意味な意地だが。

「方枷君、さっきは凄かったね〜！」

神代学園一の美人でボクのクラスメイトでもある藍口 碧が話しかけてきた。

「ああ、そっか？」

「うん！……だって、寝ていたのに答えをすぐに書けるのって方枷君くらいしかないし」

「あー……」

まあ、あんな事は一般の人にはできないな、確かに。

藍口はその綺麗な小顔をボクの方へと近づける。

相変わらずの可愛い顔に普通の男なら思わず、ドキッとしてしまうだろう。

しかし、ボクはそんなどこかのラブコメの主人公みたいな奴ではないので、絶対にそんな事はならない……多分。

「私も方枷君みたいな“天才少年”になりたいな〜」

「それを言うなら、藍口の場合、天才少女だろ・・・？ それにボクは天才じゃないし、藍口の方こそ今のままでも十分だと思うけど

？」

「私はあんな風に寝ていた時に問題を当てられたても、アニメみたいに、パツと答えられる人になりたいの！」

「…無理、無理。あれはボクだけの技だって」

「むうー」

藍口は膨れた顔になって、ボクの頭をぽかぽか叩く。

この藍口の攻撃、実は地味に痛いんだよな…。

と、ここでボク達の担任の美咲先生が教室に入ってきた。

「皆、席について。終礼を始めるわよ」

後ろで頭を叩いていた藍口も先生が来たことで諦めて自分の席へと座る。

藍口からの攻撃から助かったボクは、嘆息をして、教室の窓から空を見る。

天気が悪かったせいなのか、少し暗くなっていて、夕日はもう沈んでいた。

無事に終礼を済ませた後、ボクはいつものように藍口と一緒に帰宅していた。

まあ、学校を出るまでは彼女のファンクラブ（神代学園では藍口さ

ん同好会と言うファンクラブらしきモノが存在している。もちろんながら、同好会は男の比率が100%でそのメンバーが全員むさ苦しい奴等ばかりだ。〽の方々のギスギスとした殺気のこもった視線が背中に何本も刺さっていたが…。

それについてはスルーの対処でいこう。

「ねえ、方枷君」

藍口の足が止まり、ボクもそれに合わせて止まる。

「なんだ？」

「方枷君ってさ…。ブラッドロードの“呪い”って噂、知ってる？」

「……いや、知らないな」

「そっかあ…。…ブラッドロードの“呪い”って言うのはね、紅い線に繋がれてしまった人が、その線から逃げられなくなる話なんだよ」

「……タチの悪い噂だね」

「でもね……。これは噂なんかじゃなくて、実際に起こった事なんだと私には思っただ。だって、そうでもなきゃ、こんな噂話流れないし……」

「でも、噂は噂だろ？」

「…方枷君って夢がないなあ」

藍口は目をきらきらさせながら、子供のように話した。  
その話を聞いたボクは、複雑な思いだった。

皮肉にも確かにブラッドロードの“呪い”はある。

藍口が言っている事とはまったく別物なのだが。

異端者。一般の人には絶対に知られていない者達。

ボクもその中の一人、そして“呪い”という名の罪を受けた者だ。  
そして、呪いは今も僕達に残っている。

消えない痛みと共に……。

「……方枷君？」

藍口の呼び声にハツとする。

「あ、ああ……。ごめん」

「別に私はいいけど、方枷君大丈夫？…なんか顔色が青ざめているよ？」

そう言われると、今の自分の状態はそんな感じだと思える。

「大丈夫だよ」

ボクは藍口に心配させないように、無理に元気な顔を作った。

「…うん。なら、いいんだけど……」

「よし、早く帰って今日は寝るよ！多分、日頃から勉強のしすぎで貧血でも起こしたと思う」

「そうなんだ！……って、方枷君、勉強なんてしてないじゃん！」

「ボクのボケに0.5秒で突っ込むとは……流石だな、藍口！」

「……もおゝ！……心配したこっちが馬鹿だったようゝ」

またさっきの、終礼前の時の会話になってホッとする。

ボクはまた膨れた藍口に頭をぽかぽか叩かれながら、道端を歩き始めた。

今の生活は本当に悪くなくて……、むしろ心地いい。

だけでもし、“裏のボク”の顔を表の顔を知っている誰かが知ってしまったなら、それは大きな裏切りとなってしまうだろう。

だから、夜が来るまでは、ずっと楽しいこの日常を。

けど、夜が訪れてしまうとボクは



## e p 1 ブラッドロードの呪い（後書き）

この小説を見ていただき、ありがとうございます。

良い点、悪い点等多彩な感想を書いてもらえると嬉しいです。（感想くれえーwwww

一応、時間があれば更新し続けていくのでよろしくお願いします）  
てか本文を見てやってくださいw（えッw）

さて、一話をようやく完成させた所であえて言いますが……。

この話はぶっちゃけラブコメに……、はいww嘘ですww（すみません（汗）

まあ、冗談はさておいて。

2話からは彼方の夜の顔……つまりは“裏の顔”を書いていきます。

まあ、ダークファンタジー？（てか、アクション物なのかな？）系なんでねw。

というか、桃月はこのファンタジー系を書くのはもしかしたら初めてになるかもしれません！！

なので、「こんなのファンタジーじゃない」等は大目に見てやってください（汗）



では、また二話のあとがきで会いましょうw

ゞ(\*。^\*)( see you next time !!

## e p 2 ダブルフェイス

「今夜の月は…、本当に曇りもなくて綺麗だな」

市街の中でも、大きいビルの屋上に、ボクは立っていた。

「何故、こんなところにいるのか……？」と聞かれてしまうと、説明をする気はないのだが、やっぱり答えづらい。

外は案外寒くなくて、少し厚着だったボクは黒い上着を脱いで、腰に巻きつけている。

< heresy、現在の位置を確認したい。応答してくれ >

腰に吊るしておいた無線機から、女性の綺麗な声が流れてきた。

heresyと呼ばれたのはボク。

そう、“今のボク”は方枷 彼方ではなく、heresyと呼ばれている。

「こちら、heresy。現在は市街のセンタービル屋上で待機中」

<了解した。ターゲットが動き始めたら、また連絡を入れる >

そう言つて、相手は無線を遮断する。

ボクはと言つと…。

無線の内容なんかは、どうでもいいようなくらい、綺麗な月を見ていた。

そう言えば、“彼女”が消えた夜もこんな綺麗な月だったような気がする。

曇り無き空の上には、たくさんの星空と真つ白な月で飾られていた。あの悲惨な出来事が、まるで嘘だったような……、そんな印象がボクに残されていた。

< heresy、ターゲットが間もなく動き出す。すぐに行動できるように備えてくれ >

「……………わかった」

ボクは空を見るのをやめて、地上を見下ろす。

ざわめく回廊は人々で満たされて、ボクがこれから行う事など、その光景を見たら、嘘みたいなようで。

もし、キミが生きていて、ボクがこんな事をしているのをキミが知ったら……。

多分、泣くんだろうな……と思う。

「捕らえられて、たまるかって！」

男はそう呟きながら、この暗い夜道を走っていた。

汗でびっしょりの顔で、手には大きなトランクケースを持って、何かから逃げているようだ。

タン、タン

後ろから、2、3人くらいの足跡が聞こえてくるが、男は振り向かない。

多分、そんな余裕はないのだろう。

流れていく汗を気にせず、ただひたすら、逃げる事だけを考えていた。

前には二つの小道で別れていて、男は右の道へと走りぬける。

そして、その道に置かれていた汚いごみ箱の中に隠れて、やり過ごす事を決めた。

追いかけてくる足跡はさっきの二つに別れた小道辺りで止まる。

「奴はどっちへ言った!？」

「わからない。俺は左の道を探すから、お前達は右の方をあたってくれ」

「わかった!」

追いかけてくる者達は二手に別れて、男を追った。

もちろん、男はゴミ箱に身を潜めて、その話を聞いている。

追跡者達の足跡がだんだんと遠くなっていくのを確認して、男は外へと出た。

服にはゴミ箱に隠れていただけの事はあって、物凄い汚物が体中についていた。

「……どうやら上手く成功したみたいだな」

男はぎつしりと手にしたトランクケースを見て、ニヤリと笑った。

「こいつがあれば……“国一つだって墮とせる”。確かそうアイツが言っていたな」

来た道を引き返しながら、男は欲望で駆られていた。

男はまだ、トランクケースの中身を見てはいないのだ。

依頼者は“決して見るな”と言っていたが、“国一つだって墮とせる”と聞くと、どうしても覗きたくなってしまう。

「俺が盗んだんだ。少しくらいは見てもバチは当たらねえよな」

そう言つて、男はトランクケースの中身を開けようとした。

その瞬間だった。

男の背後から、声が聞こえてきたのだ。

「残念だが、そのトランクケースは返してもらおうか」

男は後ろへと振り返る。

そこには、まだ幼さが抜けきっていない、漆黒のコートに包まれた少年が立っていた。

ボクは体のあちこちに汚いゴミがついた男を見る。

手には“例の物”を持っていた。

組織から、どうやって盗み出したかはわからないが、あの男が持っているのは間違いなくそれだ。

「……大人しく素直に渡したら、あんたを逃がしてやってもいい」  
ボクは自分の腕を軽く慣らした。

「子供が偉いような口を叩く、世の中に変わっちまったか？」

「別にそう思ってくれても構わない。……ケースを渡せ」

「へっ！ここまで盗んでおいて、『はい、そうですか』とあっさり渡せるかって！」

そう言って、男は空いていた手をボクの方へと向けた。  
そして、その刹那に、男の手から炎が放たれた。

（ 異端者！？ ）

「 ツー！ 」

慌てて交わしたが、右肩から腕まで、服が炎で溶けてしまった。  
右肩を抑えながら、ボクは男へと目を向けた。

「 どうだ？ 熱いか？ これが俺の異端能力“炎舞”だ 」

男はボクを見て、歪んだ笑いをする。  
ボクの最も気に食わない、そんな顔をしている。

「 これが……アンタの答えか？ 」

「 ああ、俺はお前みたいなガキにケースを渡しはしないし、負けもしねえ。悪いが……お前にはここで死んでもらうぜえー！ 」

「 ……そうか 」

ボクはもう語るまいと両手を添える。

誓約を誓う

ボクがそう言い終えた後に、地面から長い槍が出現した。

いや…、「出現した」よりは「地面が槍へと変わった」と言った方が正しい。

手前の地面はごっそりと何かが持っていたような、大きな穴ができていて、男はそれに驚愕していた。

ボクはその槍を掴み、男の方へと突きつけるように構える。

「お、お前も異端者だったのか！？ そ…それにその能力はまさか……！？」

「紹介するのが遅れたな……。これがボクの能力“誓約誓誕”だ」

「…誓約………誓…誕…っ！？」

男は後退しながら、再びボクへと手を向けた。

「そ、それがどうしたってんだ！ 俺の炎の方が強いんだっ！

」

そう叫びながら、手からさっきよりも大きさが増した炎が繰り出された。

ボクはその炎を槍で振り払っていく。



「なっ！……俺の炎が……消えていく……」

槍の一振り、一振りが炎をかき消していくのに男は驚きを隠せないようだ。

「さっき、槍を練成した時に地下水を混ぜて造った。炎には水を……、ボクの“誓約誓誕”はそういう事も可能なんだよ」

「そんなのありかよ！！く、くそ！」

男は何度炎を繰り出しても、ボクはその回数分、槍で振り払い、男との間合いはだんだんと縮まっていく。

男は後ろへと下がろうとするが、背後には壁で道は塞がれており、何かに躓いて、地面へと扱ける。

どうやら……もう終わりのようだ。

ボクを見るその男の顔は……。

ただ迫り来る恐怖に怯える子供のような顔だった。

かつてのボクみたいな……、何かにしがみ付きたい顔を。

「た……頼む！ ケースは渡すから、い……命だけは助けてくれ！」

「……なら、ケースを渡せ」

「ほ、ほらよ！」

ケースを無事に受け取り、中身を見てみた

ケースの中身、例の物は安全だったのを確認する。

「こちら、heresy。ケースは無事に取り返した、中身も無事だ」

<…よくやった。持ち出した者はどうした？>

「…………殺したよ」

<確認した。では、h e r e s yは予定の合流地点へと向かってくれ>

「ああ、わかった」

無線機から通信は終わり、槍を元の形に戻した。  
そして、ボクは振り返って、男へ向けて呟く

「これでアンタはもう大丈夫だろう……。ここからは逃げても構わない」

「…そうか、助かった。本当にな…………っ！」

男はそう言って、立ち上がり、ボクの腕を掴んだ。  
そして、何やら赤いモノが腕からあふれ出す。

「馬鹿めっ！…………簡単に騙されやがって！ お前みたいなガキはあの世で後悔しろっ！！」

炎は一気に腕を燃やしていく。  
快楽を得た笑いをする男はもはや、ボクからしてみれば愚かで仕方なかった。

だけど、もっと愚かなのはボクなのかもしれない。  
だって……ボクはこの時に微かに殺意が芽生えてしまったから。

だから……

腕に絡んでいた炎はだんだんとかき消されていく……。

男は何が起こったか、分からない顔をしていた。

当たり前だ……。

分かるはずもない。

この男にも……、そう、誰さえも……。

ボクの体自体に“誓約誓誕”が掛けられている事を。

故にボクの体は、人と同じように年はとっても、死ねない体になってしまった。

そう、ファンタジー小説等で出てくる、不死のドラゴンのように……。

無傷のボクに対して、男は再び恐怖の顔に陥る。

「そ……そんな！ ど、どうしてだ？ まともに食らったはずなのに……」

そんな男の問いなど、無視して流す。

ボクの頭の中には、もう抑えられない殺意の衝動でいっぱいだった。

「……誓約を誓う」

ボクはがむしゃらに地面を集めて、切れ味の良い日本刀を形成する。そして……その男の方へと振り上げた。

「ま、まってくれ！！ ……さっきのは軽い冗談だ！ 悪気はなかったんだ！ だ、だから」

男の話等、もうどうでもよかった。

ボクはそのまま一気に刀を振り下ろした……。

ブシュッ

血が吹き出ると同時に、男の頭は真っ二つに割れて、首元まで裂けた。

真っ向から、血を浴びたボクは髪の毛から足元まで、全身を血で赤に染められた。

床に大量の血が流れる。

その血を欲するかのように、ネズミが何処から湧き出て、無惨な死体へと集まっていく。

刀を崩し、ケースを握り締めて、ボクは予定合流地へと向かった。

顔は返り血の所為か？

何故か……熱く感じた。

ボクは…。

ボクは……もう、あの頃のボクには戻れない。

血で染まった手は、やがて明るい世界の人々へも害を及ぼしてしまうから。

でも、キミだけは…。

あの日のキミだけはどんな事をしてでも、取り戻すから

だから

## e p 2 ダブルフェイス（後書き）

はいw

二話をようやく書き終えました！！

桃月です！ d（．．．）

さてさて、今回は戦闘シーンとシリアスのシーンを入れましたがどうでしたか？

戦闘のシーンの描写はボク、とても苦手なので辛口感想とかあればどしどし言って欲しいですw（汗）（参考にしますおっおw  
ww

（．A．）．．．。

さて、なんだか話が逸れてしまいましたね．．．。（汗）

これはプロローグから二話まで、共通で出てきているのですが、

彼方が言う、「彼女」や「キミ」

この人物は3年前、彼方が自分の異端を手に入れると同時に対価として失った人でもあります。

まあね、この少女の名前はもう決まっているんですけどねw



そこは楽しみで (サーセンwww

では、第3話のあとがきでまた会いましょう！

ゞ(\*。^\*)ノ see you next time !

e p 3 悪夢

ボクが予定合流地にたどり着く頃には、もう時間は12の針を回っていた。

予定合流地……、下鴨公園には既に組織の者が数人、彼女等の背後には大きなヘリが用意されている。

どうやら、ボクが来るのを待っていたようだ。

ボクはケースを手に、組織の者達へと近づく。

そして、依頼の度によく顔を合わせる馴染んだ金髪の女性へと話しかけた。

「……ケースはこの通り、無事だ。一応、中身も確認してくれれば助かるんだが」

「わかりました」

「……どうだ？　ちゃんとそれがアンタ達の物がどうか確かめてくれよ」

「これで間違いないです。では、契約金を」

そう言つて、ヘリから別のケースを持ってきた男が女性へと渡した。

「どうぞ、フェルナさん」

「…ありがとう」

フェルナと呼ばれた女性はボクへとケースごと渡した。

ボクはそのケースに入っている金額を確認する。

この人はフェルナ・シユタルツド

まだ、年も若いのに組織の幹部の彼女は、こういった汚れ仕事を組織に任されている。

彼女の経歴は不明だが、彼女も異端能力者の中の一人だ。

能力は不明だが、数ある危険な任務を任されて、そして100%の確立で成功させると言われている。

組織にとっては、差し詰め“戦場の女神”的な存在だろう。

そして、毎回厄介な事をボクに依頼してくるといふボクにとっては迷惑だけの女性だ。（ただし、彼女の方は何故かわからないが、僕の事を気にしているらしい……）

ボクとしては、あまり関わりたくないのだが、こっちは雇われの身なのでどうしようもない。

「よく依頼した通りの活躍をしてくれます。……流石ですね」

「それはボクに対する褒め言葉……と素直に受け止めていいのかな？」

「ええ、私はそっちの意味で言いました」

本当に何かと固い人だ…。

さつき、人を殺したばかりなのに、この女性となると昼間の自分を思い出して他ならない。

「それでは、私達はこれで失礼します」

「…ああ」

「では、また何かあったら、呼びます」

そう言って、彼女とその部下達はヘリへと乗った。  
ボクはヘリが離陸するのをじっと見つめていた。

ボクと組織…… “ベラロツテ”（これが組織の正式な名前だ）との

関係は傭兵とその依頼主。

ただ、そこらの雇われた兵とは違い、ボクは組織専属の雇われた兵だ。

だが、専属の雇われた兵というのは結構不便なモノで、好きに雇い主を選べないのが最大のネックだ。

そこに組織が「高額な報酬」と「ブラッドロードの最新情報」をボクに提供するという提案を出したのだ。

ブラッドロードの情報に関しては、ボクにとっては思っていた以上に貴重な事だった。

そのデータを解析し、失ったモノを取り返すために…。

ボクは何の迷いもなく、この組織の専属兵となった。

だって誓ったから。

あの日の自分に……。

絶対に彼女を取り戻すと。

懐かしい花畑に壮大な星空。

まさしくあの時の光景だった

だけど、ボクはあの時よりも随分と成長している。

「久しぶりだね」

ボクへ声を掛ける彼女を見つめ、傍に駆け寄った。

彼女の姿は、まったくあの時と変わっていない

ただ、表情はとても寂しそうな顔をしていて……。

だから、ボクはそんな彼女に何かできないかと、彼女の腕を引っ張って、花畑を走りまわった。

息が切れる程に……、そう、笑いながら彼女と

僕達は疲れきったので、花畑へと寝転んだ。

その花畑は夏にぴったりの向日葵で満たされていた。

彼女が傍にいただけでボクにとっては幸せだ。

でも……彼女は？

嫌な衝動に駆られて、ボクは彼女へと質問をする。

「ねえ、キミは楽しい？」

彼女はボクの問いに頭を縦に振った。

でも……。

その顔にはまだ寂しさが抜けきっていないくて、何か……何かが足りないと感じた。

その時、地面から紅い線が僕達の間を遮る様に浮き出てきた。

あれ……？

確か……前にもこんな光景をどこかで……。

そもそも、なんでボクは“この光景を知っていたんだろう？”

だいたい、“あの時の光景”ってなんだ？

全て、初めて……なはずだ。

なのに、どうして？

頭の中で幾つもの思考が交錯する。

だが、そんな時間の余裕を与えてはくれなかった。

誰が？ 何が？

『そう、この忌まわしい線が……。』

……線？

そつえば、ボクと彼女を分け隔てるかのように線は引かれている。

なんだ……、この異様な不吉な予感……。  
体中が……熱い。

（なんだ、これ？）

ダメだ。何かを思い出そうとしても頭がズキズキと痛み出し、もう  
それどころではない。

そういえば……彼女は？

彼女がさっきいた方向へと目を向けた。

そこには、息苦しそうに花畑へと倒れていた彼女が……。

彼女の名前を言おうとしても、この頭痛と体の熱さで阻まれて、口  
にする事ができない。

くそ……、くそおつ……

気づくと、よろよとした動きでボクは彼女の方へと向かっていた。  
夢中だった。彼女が心配で……、ボクがしっかりしなきゃ……と。  
もうすぐだ。

後一步…… たったそれだけの距離で彼女を抱きかかえる事ができる。  
ボクは最後の力を振り絞って、彼女の倒れた距離へとたどり着いた。  
そして、傍へと一気に座り込む。

「おい、おい！ 目をあけてくれ……！」

声を出せるくらいには頭痛も回復していて、はっきりと映った視界  
で彼女を見る。

だけど、ボクの声はまったく聞こえていないのか、彼女は一行に目  
を開けてくれない。

それどころか……。

「  
体が透き通っている……！」



彼女の体はだんだんと薄明へと変わっていく。  
そんな……。  
なんなんだ、これは……。  
彼女が……。一体何をしたって言うんだ？  
ボクだって何もしていないのに

『本当にそうか？』

ボクに疑問の槍が突き刺さる。  
だって、ボクはただ彼女の傍にいただけで

『なら、どうして彼女を守れなかった？』

それはボクの弱さを証明するに等しかった。  
抱きかかえた彼女の姿は、もう形を整えるのが精一杯な様子だ。

「い……や……だ……。頼む……。消えないでくれ！」

ボクの叫びもまったくの無意味で、彼女が消えていくのはまったく止まらない。  
悲観に暮れていた時……。  
彼女が力を振り絞って、何かをボクに伝えようとしている事に気づいた。

口をパクパクと動かして、擦れた声でボクへと…。

一文字動かす度に、消えていく彼女をボクは必死で見守る。

そして、最後の文字を言い終えたと共に、抱えていた体がボクの体ごと透き通った。

もう、触れる事すらできない…。

ボクは悔しい思いでいっぱいになり、目線を逸らして、ひたすら涙を流した。

その一瞬だった。

目を戻すと……彼女はもうそこにはいなかった。

周りを見渡すも……、誰もいない。

嘘だ……。

こんなのは……夢に決まっている！

『本当にそうか？』

黙れ！ ボクにとって彼女はたった一人の大切な人だったんだ！

それなのに……。

なんで…、どうして？

誰にもわからない疑問を自分自身にぶつけながら、彼女が最後にボクに伝えたメッセージを思い出す。

大  
好  
き  
だ  
よ

「く…、うわあああああああッ!!」

泣き叫びと同時にボクは夢から一気に覚めた。

顔は涙で濡れていて、夢だと言っのにさっきまでの感覚が、今でもリアルに感じた…。

「……夢…か？　なんで……なんでまたあの夢を…」

ここ最近、同じ夢ばかりを見る。

あの3年前の夢を…。

どうしてなんだ。

どうして、また……。

眩しい光に照らされて、ボクは布団から出た。

そして、嫌にべた付いた汗を洗い流して、部屋の窓を全開にした。

e p 3 悪夢（後書き）

さて、今さっき3話を書き終えました。

今回の見所は彼方がリフレインしている所です。

まあ簡単に言うと最悪の出来事を再現してしまった…。みたいな感じですね。

でも、あくまで彼の夢の中の出来事だったのでそこは少し内容を変えてみました。

ボク個人では彼方に想われている少女が「大好き」と言うシーンが自分の中で、書いていて一番心に応えました…。

ええ、なんか悲しい物語を書いてしまってます、桃月です。（汗）

てか、なんか今回真面目に答えすぎましたねwww（気づくの遅いわ

（´・・´）

では、4話のあとがきで、また！

ゞ（＊。＾＊）ノ see you next time !

## ep4 ハプニングな午前

「ふう……」

登校途中の見慣れた風景。

ボクは今、藍口の家まで迎えに来ていた。

もちろん、一緒に登校するためだ。

どういう訳か…、藍口とボクは入学当初から、一緒に登校している。まあ、クラスメイトの中でも、一番仲のいい友達が藍口なので、ボクとしても一緒に登校できて楽しかった。

ボクは軽くインターフォンを二回鳴らした。

それに出てくれたのは、活気良さそうな男性の声……、藍口のお父さんだ。

「…方枷です。藍口さんを迎えに来ました」

「おつ、毎日すまないね。方枷君」

「いえ…、ボクがいつも一緒に登校させてもらっているんで」

「ありがとう。少し待っていてくれるかな？」

「ええ、わかりました」

「おーい、碧々！ 方枷君が来てくれたぞー！

」

藍口のお父さんが、急かすように言う。  
それに対して藍口はというと……。

「えっ！　ちよつと待ってえ〜！」

さっきから数えたら、3回は軽くもう言ったな。

（相変わらず、朝には弱い奴だな…）

インターフォン越しで会話する親子に、クスクスと笑ってしまう。  
すぐく仲の良い人達だ…。

一人暮らしなボクにとっては、それがとても羨ましい事だった。

玄関のドアが開き、ボクは髪の毛が少し跳ねた美少女へと挨拶をかける。

「おはよう、藍口」

「お…おはよ〜！」

「……髪の毛、跳ねてるよ?」

「え!?! 嘘!?!」

藍口はそう言つて、カバンからコンパクトなサイズの鏡を出した。

「…うゝ、ほんとだあゝ」

「ぶッ…、ドンマイ」

「もう笑わないでよあゝ! しかも、ドンマイじゃないよあゝ!?!」

昨日と同じような膨れた顔になり、またボクの頭をポカポカと…。  
しかも、昨日よりも少し強く叩いているかも。

「ゴメン、ゴメン! 痛いって……」

「むうゝ! 方枷君のばかあゝ!」

あ、また力が強くなった……。

「そうそう! 藍口」

ボクは藍口の攻撃から切り抜けるために、別の話題を引き出す。



「ボク達のクラスってさ、学園祭で何するんだ？」

「私達のクラスは喫茶店をするんだよ」

「へえ。もう役割とか決まっているのか？」

「方枷君はもう決まっているよ」

「おっ！ 何々？」

藍口はニタアと笑みを浮かべて、ボクの方へと顔を向ける。

「女装ウェイトレス」

「……………」

えーと…。気のせいかな？

藍口はウェイトレスの前に女装って言ったように見えたんだけど…。

女装ってあれだね、女性の格好に成りすますって事の……。

「あ、嫌なら、もう一つ。女装コックさん」

あの一、… 藍口さん。

何故に女装のコック？

コックって別に女装なんてしなくてもできるんじゃないのかな？

しかも、どうしてボクの選択肢は女装しか残されていないの？

これって理不尽にも程がある……ていうか、理不尽だらけじゃん！

「あのさ…、悪いけど、ボクは別の役割を希望するよ」

「ええ〜！ もう決まっているのに〜！ むう〜！」

藍口はそう言って、さっきまで止めていた攻撃を再開し始める。

ああ…、痛い。

これ、ホントに結構痛いんだよ……。

「……はあ〜。今日も一日、大変だ」

空を見上げて、肩を下ろし、ボクは嘆息をした。

「やっとだ…。やっと君を見つけたよ」

とても、男性とは思えない程の綺麗な顔立ちの男がモニターに映った少年を見て、笑う。

その笑みはとても人間のモノとは思えず、獣が獲物を見つけたような顔をしていた。

男の身の周りには死体の山と大量の血で飾られていた。

死体の顔は狂気に引きつつていて、残酷としか言いようが無かった。

男は死体に突き刺さった刀を抜いて、刀にこびり付いた血をなぞる様に舐める。

「ああ、1年と3ヶ月ぶりだねえ。この前は、炎舞の者がお世話になったね。ごめんねえ」

男のこの言葉は少年へと向けられているのだろう。

そして、刀を腰に付属した鞘へと戻し、惨殺された部屋を出る。  
ドアの壁横には男が会いたがっている少年が属する組織、ベラロツ  
テのエンブレムと「heresy」と書かれたプレートが掛けられ  
ていた。

ああ、なんて素晴らしい日になるんだろう。

男はそう思いながら、狂気へと満ち溢れていた。

「早く会いたいなあ、  
“カ・ナ・タ”」

既に時間は12時を回っていて、午前の授業もこれで終わりだ。  
もちろんだけど、ボクは授業を放棄して、寝ています。  
理由はこうだ。“眠たいから”

あまりにも馬鹿だとは思っけどさ、自分欲求には素直に生きなきゃね！

そう開き直りながら、ぐっすりと眠っているボクに背筋が凍る感覚がいきなり襲った。

「ッ！？」

なんだ…！

ボクはこの感覚がなんなのかは説明できなかった。わからない。上手くは言えないのだが、こう……なんなのだろうか…。嫌な悪寒……とでもいべきか？

本当に自分でも訳がわからない。

多分、そこまで気にしなくてもいいような事なのに……。例えて言えば、そう……。

まるで、“何処か遠くから、誰かに見られていた”感じた。その感覚のせいでボクははつきりと目を覚ましてしまう。席の隣では藍口が心配そうにボクを見ていた。

「なんか顔汗だらけだよ？」

「ごめん、ちょっと熱っぽい…かも…？」

「……………」

藍口が黙り込み、そして…、何かを考え終えたのか、前で教科書を読んでいた先生に話しかける。

「先生、方枷君が少し熱っぽいので、私…保健室に連れて行ってもいいですか？」

「えっ…、藍口？」

ボクは藍口を見つめる。

呆然とするボクに対して、藍口はいつもとは真剣な顔で先生を見ていた。

「…わかりました。では、藍口さん。方枷君をお願いね」

「はい！　ありがとうございます」

そして、ボクの肩を担ぐみたいな感じで、ボクと藍口は教室を出て一階にある保健室へと向かった

「本当に大丈夫？」

藍口はベッドに横たわるボクを見て、心配している。

藍口の顔は少し涙ぐんでいて、本当にボクを心配してくれているのが、否応にもわかった。

別に熱くもないのに、汗がどうしても出てしまう。  
ボクは汗ばんでいたシャツの第一、第二ボタンを開けて、ぐったり  
と言葉を返した。

「…うん。まだ、…：少しくらくらするけど、たいした事じゃない  
と思う」

「…：良かったあゝ！」

「それよりも、ボクにつき合わせてゴメンな……」

別にそこまで、たいした事じゃないと言うのに藍口を保健室まで連  
れまわして…。

本当にボクは何をやっているんだか……。

「ううん！ ……その…方枷君が無事だったし。だから、いいよ…  
！」

藍口はさっきの顔から一変して、今度は赤くなっている。  
ん？ どうして藍口の顔が赤くなっているんだ？

（こいつも熱っぱいのかな……？）

ボクはそう思いながら、藍口の額に少し汗ばむ手を添えてみた。

「あ……！」

手を当てた途端、彼女の顔は見る見る内に赤く上気していく。

プシュ……！

頭から、何やら湯気（？）みたいなモノまで出てきている。  
って、普通人から湯気なんて出ないぞ。  
うーん……。藍口 碧、……未だに謎めいた奴だ。

「んー……」

そしてどうやら、今のボクの体温よりも藍口の方が熱く感じるのは  
気のせい……ではなさそうだ。

「藍口、お前の方こそ保健室で休んだ方が良さそうぞ？」

「あ……、いや、……私は教室に戻るよっ……！」

「そ……そうか？ まあ、それなら別にいいんだけど……」

「じ、じゃあね！ あ、何かお昼食べたい物あったら、携帯で教えてね！ 買ってくるから」



そう言つて、藍口は保健室から出ようと……。

ゴツンッ！

あつ、今頭…壁に打った。

見事に壁をドアと間違えて、藍口は頭を激しく打っていた。

その抑え方からして、少しオーバーだったけど、結構痛そうだな…  
…あれ。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですう！」

そう言つて、ドアに手を掛けようとして……。

ドンッ！

今度は床に滑つて、藍口の腹部が床と衝突した。  
さっきのよりも、こっちの方が遥かに痛そうだ。

「~~~~~!!」

「おーい…。本当に大丈夫なのか？」

「う…、うん！」

藍口……。

残念ながらけど、今日からボクは、キミを「ドジ娘」として認識するよ、うん。

さっきまで頼りがいのあった彼女が、一気に正反対へと豹変したのを見てボクは、「見事な程のドジ娘だ！」と思っただけであった。

## e p 4 ハプニングな午前（後書き）

さてさて、今回の4話では見事に桃月の悪ふざけが展開されていたねw（えww

前回は少し、暗かったので今回は碧ちゃんに一役買ってもらいましたよー！

ムフフツwww！（うえうえww

さて、気になる点はと言いますと…。

真ん中辺りで、彼方に会いたがっていた男。

実は彼、一度昔に彼方と戦って、互角に渡り合った人でもあります。でも、彼方に重症を負わされて、一年以上の年月を隠れて過ごしていました。（てかさういう設定ねwww（ぶはw）

さて、いよいよですね！

この桃月の妄想ワールドが暴走するのは！！？（えwww

では、次回のあとがきでまた会いましょう！

ゞ（＊。＾＊）ノ see you next time！！

PS、この作品、初投降の日で50人を超えてくれました。桃月はかなり喜んでたりしています！（´・・・´）

これも読者の皆さんのおかげです、ありがとうございます！

e p 4 . 5 恋心

ヤバイ…ヤバイよ……。

まだ、顔が熱い。

私は方枷君を置いて、保健室を後にしていた。

方枷君は私の気持ちに気づいていないようで、良かったけど…。

でも逆に言うと、彼のその鈍感さが欠点だとも言える。

私から見れば、容姿はカッコいい方だと思うし、背だつて十分なくらい高い。（確か、この前に身長は172cmあるって本人が言っていたっけ…？）

スポーツもできるし、勉強の方に関しては天才を発揮している。

でも……。

私が好きなのは彼のそんな部分じゃない。

まあ、多少は外見も好みなので、少しは嘘になってしまふのだが…。それでも、私が方枷君を好きになったのは、彼の何気ない優しい性格に惹かれたからだと思う。

神代学園に入学した当初、この街に引越してきた私は友達なんていなくて、本当に心細かったのを今でも覚えている。

入学式が終わった後、新入生は自分達のクラスが発表されるのを確認しなければいけないので、体育館に残っていなければならなかった。

知り合いもいない私は、一人で早く自分のクラスが発表されないかと待ち焦がれていた。

「おい！ 見ろよ！ あの子すっげー可愛いな！」

「ああ！ 何組なんだろう？」

「うーん。あんな女の子みたいな彼女欲しいな……！」

何本もの視線が私に向けられる。

向こうはひそひそと話しているつもりだと思っただが、こっちは丸聞こえだ。

私は別に目立ちたくなんかないのに……。

うんざりしてしまう。

どうして男の人ってこう……女性を顔だけで判断してしまうんだろ  
う？

私なんか、容姿を覗いてしまえば、ただの何も無い少女だと言うの  
に……。

< …… B組、藍口 碧さん。 >

私の名前が呼ばれ、私はBの担任の女性先生の方へと移動していく。  
先生の前に並んでいた男子生徒の後ろへと座り込んだ。

この前に並んでいた生徒が……後に私にとって、かけがえのない人  
になるとは、この時の私には思ってもみなかった。

新入生クラス発表が終わり、各生徒達は自分のクラスへと向かって  
いく。

私はBの札が張られていたクラスへと移動した。

そして、自分のクラスの前まで来たところで、足止めて窓からクラ  
スを覗いてみる。

クラス内は結構賑やかで、楽しそうだった。

中には私みたいに、一人ぼっちに席に座っていた女の子もいたけど、数人の男女がその子に近寄って、話を混ぜてあげていたりしていた。それを見て…安心できた。

何に安心したのかは…多分“イジメられる”という概念が自分の頭のどこかに存在していたからだと思う。

私の容姿は何かと同性の人達にとってはやっかいなものだった。

前に、住んでいた町の中学校に通っていたときも、この自分の容姿が気に食わない連中から、軽いイジメを受けた事があった。

その時に、私は初めて人に恐怖を感じた。

純粹に「怖い」……と。

…だけど、このクラスなら安心できそうだ。

私はそれを見て、そう思い…。

そして、教室内へと足を運ばせた。

教室へと入ってきた私に教室にいた全ての生徒が私に視線を向ける。ビクツとしたが、私は平常心を保って、自分の名前が書かれた席へと座る。

さっきの女の子みたいに、私も席にじっと座っていれば、だれかが声を掛けてくれる。

そんな甘い考え事に浸っていた私は、その時が来るのをじっと待っていた。

……だけど、なかなか誰も話しかけてはくれない。

どうして……？

さっきの女の子を見してみる。



その子はさつきとは違い、もう他のクラスメイトと打ち解けていた。それに比べて、私は……。

多数の視線は感じるものの、未だ誰からも話しかけられていない。

「……う……」

ヤバイ……。

自身の目から、涙がこぼれるのをひたすらこられる私。

だけど、もうそんなに長くは持たない。

だって、既に一滴……。

頬に涙が伝ってしまったから。

そんな時だった。

新たに教室に入ってきた男の子が私の隣に座ってきたのだ。

確か……あの容姿はクラス発表の際に私の前に並んでいた生徒とまったく同じだった。

その男子生徒が私に話しかけてきた。

「キミ、名前は？」

「……ふえ……？」

泣きそうだった顔をあげて、私はその少年を見た。  
窓からの太陽の光に包まれて、光って見える。

「あ……私……」

まともに喋れていない私を彼は笑った。

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ」

「あ…その…ごめんなさい」

「いいよ、いいよ。…そうだ、キミは地元の子？」

「…うん。私、引っ越してきたから…友達とかそっぴいのな  
くて…」

「そうなんだ。…なら、ボクと同じだね」

「え…？」

彼は少し悲しい顔して、私を見つめた。

私の胸がドキツとする……。心臓はバクバクと速さを増してきて、  
もう抑えられなかった。

彼の…私を見つめてくるその赤い瞳に、私は吸い込まれそうなくらい魅入っていた。

「あ、私の名前は…、藍口 碧」

「よろしく。藍口さん」

そして、立て続けに少年は言う。

「ボクの名前は」

多分、この時から……。

この時から、彼に惹かれていたと思う。

ちゃんとした理由なんて、多分ない。

だけど……。

この気持ちは本当だから……。

だから……。

彼方……。方枷 彼方。

さすがにあの時から、お互いの性格は随分と言う程でもないが、変わってしまったと思う。

私は少々活発になって皆とも仲良くなったし、彼の方は初めの言葉の丁寧さが抜けて、今ではすっかり私の事を「藍口」と呼び捨てだし……。

でも、お互い根っこの部分は変わっていないと思う。

だって、『彼方』の優しさは今でも十分に感じるから…。

私は後ろへと振り返る。

そこはさっきまで二人がいた保健室。

「早く元気になれよ！ バーカッ」

そこにはこの日で、一番幸せに笑っている私がいた。



## ep 4・5 恋心（後書き）

えーとですねwww（。――。）

この4・5の話はまったく本編と関係ないんですけど……入れちゃいましたw！（汗）

まあ、碧ちゃん視点での番外編と受け取ってくださいwww

ええ、ホント。。。。

恋する女性ってのは本当に輝かしく見えますよね〜w！（うえうえw

さて、次回はep5なんですけど……。

少しここのらで、物語を進めなきゃねえ〜と考えています。

まあ、今ちんたらやっているんでね…（汗）

（・A、）…………。

では、また次回のあとがきで会いましょう！

ゞ（\*。^\*）ノ see you next time !  
！

e p 5 狂宴<前編>

保健室へと運ばれてから、だいたい20分〜30分くらいたった。

もう、4時間目は終わっているだろう。

体がようやく落ち着いてきたので、ボクはベッドから立ち上がる。まだ少し、体はクラっとするが、汗は止んで十分に動ける状態となった。

「一体、何だったんだ？」

実に不可解な事だった。

ついさっきの……あの背筋が凍るような視線。

最初はボクを狙ってきた異端能力者とは思っていたが、気配は感じなかった。

だからこそだ……。余計には訳がわからなかった。

こんな感覚は、前にも一度あった。

ボクが……“ヤツ”と初めて戦った時、その時も同じような感覚をしていた。

だけど、“ヤツ”は俺がこの手で殺したはずだ。

なら……この不快感は一体？

ボクはその事を頭から振り払うように、昼飯を買おうと食堂へと向かった。

食堂には藍口が、いつもボクが座っている席をキープしていた。食堂で買ったラーメンを片手に持って、ボクはそっちへと向かう。

「ボクのためにごくろう様だな〜！」

「あつ！ 方枷君、もう大丈夫なの！？」

「ああ、だいぶ収まったみたいだしね。ありがと、藍口」

「う、……うん」

そう言つて、藍口はまた顔を赤らめる。

ボクの事はおいとして、今日の彼女は本当に……一体どうしたのだろうか？

何か変な物でも食べたのか？

はたまた、さつき頭を打っておかしくなり始めたのか？（そんな事



はまずありえないのだが……)  
まあ、詳細はあまり気にしなくてもいいな！ うん。

「さて、お腹も空いたし、食べるか！」

「うん！ あ、かまぼこ発見！ 頂き」

そう言つて、ラーメンに綺麗に飾られていたかまぼこを箸で掴んだ  
藍口。

そして、それを一気に口へと入れてしまう。

ああ……楽しみにしていたラーメンが……、かまぼこが……。

「うわ……ボクの……ボクのかまぼこちゃんが……」

「これでさっきのチャラで許してあげるよ」

「はあ……」

「何？ そのため息は」

「別になんでもないよ……」

「なんか、方枷君そんなと……私が悪いみたいだね」

って、実際にキミがボクのかまぼこを盗ったからじゃないか！

誰もいない心の中で、そう突っ込みながら、ラーメンを啜る。

けど、藍口にはさっき助けてもらったので、文句は言えない……。

「むう……。なら……これあげるよ。あ……あーんして？」

藍口は手に持っていたおにぎりをちぎって、ボクの方へと持ってきた。

何故だか、また顔を赤らめて、今度は恥ずかしそうにしている。

「『あーん』……って、自分で食べれるよ」

「むう……。ほ、ほら……あーん」

む！ こやつ、意外としつこいな……。

「仕方ない……」とそう思い、ボクは口を開けようとした時に

「!!…………クッ!」

また、さっき授業中で起こった時と同じ感覚がボクを襲った。

確定はできないが、何処かで誰かに、見つめられているような気が……。

汗はもう出ないが、以前よりももっと酷く感じてしまう。

同時に、さっきまでは出ていなかった異端者の気配がする。

距離は……………近い!

「ごめん、藍口! ……ちょっとまた保健室行ってくる」

藍口が残念そうな顔と心配そうな顔を同時に浮かべる。

「う、……………うん。あんまり無理しないでね。」

「ああ。五時間目には戻るようにする!」

最後の一口を食べて、藍口を食堂に残し、ボクは走る。

異端の気配がした“屋上”の方へと……。

屋上の扉に手を掛けて、ボクはドアを押す。

そこから映った景色は綺麗で、この町の半分くらいは眺める事ができそうだった。

そして、その視界の中には一人の男がいた……。

もう春が終わって夏に入ると言うのに、凄く暑そうな赤いロングコートを身に纏っている。

紫色の長髪が風に靡いて、横顔がチラリと見えた。

「なんで……!？」

ボクは驚愕する。

その男はボクの記憶に深く印象に残った顔をしていた。思考が停止する。

アイツは、死んだはずだ……。

そう、ボクがこの手で殺した。

なのに……なのに、どうして此処にいるんだ……？

「やあ、カナタ！ 会いたかったよう！」

「ゼル……。どうして……お前が……」

「死んだと思ってた？」

「ッ……！」

「あははは！ 凶星かな？」

薄気味悪い笑い方をして、ボクを見てきた。  
ボクはそれを見つめ返して、距離を置く。

「まあ、確かに僕はキミに殺されて死んだよ。……だけど、ボクは戻ってきた。地獄の底から、キミに会うためにね！」

その言葉を聞き、ボクは誓約誓誕を発動させ、屋上のコンクリートの床を素材にした刀を作って、構える。

「やだな〜！ 僕は“まだ”キミと戦うつもりなんてないよ」

「……………」

「怖い、怖い！ でも、そんなカナタの顔もいいね〜」

「黙れ！」

直後、僕はゼルへと切りかかった。  
大きく刀を構えて、そのまま目標へとなぎ払うように…………。

ピタリ…

刀がゼルの頬から先に動かなくなる。

視線を追って見てみるとゼルはボクが振るった刀を素手で受け止めていたのだ。

ボクがそれを離そうとしても刀はビクリとも動かない。

なんて力だ…………。

前と戦った時よりも強さが増している……。

「血が上りすぎて、誓約誓誕の力を上手く活用してないね。そんなんじゃ、僕には到底勝てないよ?」

「……なんだと!?」

ボクは挑発を受け、頭にきた。

ゼルに受け止められていた刀をそのまま鎖へと変化させ、ボクは鎖を握り締め、ゼルへと巻きつけるようになる。その鎖は蛇のようにゼルの体へと巻きついていった。

「うわっ! ……これは不覚にもやられたよ!」

明らかに優勢になったボクに対して、ゼルはまだ余裕のありそうな顔をする。

(何なんだ……。こいつの余裕のある顔は……)

ボクはより力をこめて、鎖を引く。

ギュツと縛られて、普通なら体がちぎれるかと思うくらい痛いはずだ。

なのに……。

「ああ〜! カナタ……、僕に対する想いがじわじわと伝わるよ」

等と、ふざけた事をまだぬかしている。

強くなっていく鎖の縛りに対して、ゼルには余裕ある顔が残っている。

ゼルは楽しむようにこう呟く。

ボクにとってはこの上なく不愉快な事を……。

「今も“あの男”に囚われているのかな？」

「……………」

「そうなんだね。せっかく、僕がこの手であの男を殺してあげたのに」

その言葉はボクを殺意に満ち溢れるのに十分だった。



「っ！　ゼル！！」

ゼルの口から、「あの男」と出て、ボクはむき出した目でゼルを睨む。

あの男とはボクのかつての相棒“だった”男の事だ。

ボクはこいつの狂気から……相棒を救えなかった。

そんな過去があるのに……。

こいつは平然とさらっと言ったのだ。

しかも、こいつは喜んでいる。相棒を殺せた事に対して……。

鎖に絡みつки、捕らえている男に、激しい怒りと憎悪が沸いてくる。

だけど、ゼルの笑みは崩れない。

ボク達はそのまま、お互いの顔を見つめ、睨み合った。

この時点でボクはゼルを殺しておけばよかった。

今でもこの事で後悔している。

躊躇も迷いもなかったのに、殺せなかったのは己も知らぬ『恐怖』があつたから。

だけど、それは言い訳に過ぎないのだ。

結果は最悪の惨劇へと変貌してしまう。

だって、またあの時と同じように……。

この後、ボクは多大な犠牲をこいつに払ってしまう。

e p 5 狂宴<前編> (後書き)

久しぶりの更新ですねw (汗)

読者の皆様、久しぶりです。

桃月ですw!

今回の話はライバルのゼルを話に絡めていきました。

そして、昔に彼方とゼルの戦った理由も少し明かされています。

不安な事が一つ!

今回の文章は多分下手に書かれているかもしれませんが (汗) (ていうか今までも下手だと思いますが……)

多分……というか絶対に手抜きですねww (桃月が手を抜いてすみませんww皆様ww)

(´; ;´) ホントすみませんw

では次回の話のあとがきでまた会いましょう

ゞ(\*。^\*)ノ see you next time !!

方枷 彼方の誓約誓誕には誓約と誓誕の法則に従って、発動できる。

物理法則に従ったモノをその物質に誓約をかけて、違うモノへと変換させる事ができる。(従って、生物等には誓約をかける事ができない。

誓誕させるモノは自由だが、物質の質量に従うためにその物質では誓誕できないモノもある。

所有者が誓約を解かないかぎり、誓誕させたモノは永遠にその形を持続する事ができる。

確認した誓約誓誕の法則は三つである。

他にも、まだ法則が建てられるか、検討している。

方枷 彼方のような能力は異例であり、異端者にはこのような複雑な能力を持った者は他にいない、組織は彼を重宝している。

何故、彼だけがこのような複雑な能力を持ったかは、彼のあらゆるデータを調べても答えはでなかった。

現在は一から調べなおし、ブラッドロードと彼に何か共通点がないか、探している。

なお、これは異端者の話になるが…

2005年、某国の異端者が突如、異端能力を発動できなくなり、異端者から一般人に戻った。

これは各国で内密に調べられたのだが、その異端者は、当時大切だったペットが、異端能力を失う前日に戻ってきている。（これについては未だに詳細は不明）

その年の一年後にも違う国で同じような現象が見られている。

これによって、ある法則が建てられる。

“異端能力を得る代わりの代償が異端者に戻ってきた時”、異端能力は失ってしまう。

あるいは、“能力自体は失っていなくても、発動できなくなる”。

「異端者の代償が戻る」については、謎に包まれている。

この件については積極的に調べられるだろう。

組織は今後、方枷 彼方を……

heresyを観察し、その研究に取り組む方針と見ている。

e p 5 . 5 研究レポート(1) (後書き)

また、難しい設定をしてしまった…… (汗)

そう思いながら、執筆しています、桃月ですww

(怒、・・) オイオイ

さて、今回はあえて何も言いません。(てかネタ切れ?w

まあ、この内容には触れないでおこうと……

さて、後編の方ですが、また少し執筆が遅れますねwww(はいw  
すみませんww)

感想等の意見も参考に取り入れながら、丁寧に執筆したいので(そ  
れでも下手クソなんですけど(汗))すみませんが、そこは許して  
やってくださいww(まあ、執筆時間がないのが原因ですねw

では、次回の後編でまた会いましょう!

ゞ(\*。^\*)ノ see you next time !!



e p 6 狂宴<後編>

「なあ、彼方。お前の戦う理由ってなんだ？」

少年は笑いながら、ボクへと話しかける。

「そうだな……。大切な人を取り返したい…からかな？」

「そっか。俺とは戦う理由、違うな」

そう言うと、地面に座っていたボクに手を伸ばす。  
ボクはその手を掴み、起こしてもらった。

「……翼はなんだ？」

「俺か？ ……俺はな」

ボクはゼルを捕らえながら、今ではもう懐かしい記憶に浸っていた。  
相棒と共に戦った日々を……。

「どうして……翼を殺した？」

「どうしてって言われてもね。カナタの傍にいたからだよ」

「アイツを……殺す事なんかなかった！」

「ククツ……。アハハハッ！」

ゼルが突然笑い出す。

「カナタの強さを奪ったのはあの男なんだよ？ 生かしておけない  
じゃないか！」

「ボクの強さ……？」

「そつだよ。カナタの孤独、この世界を恨む意志、最高じゃないか〜！」

確かに、コイツの言う通り。

彼女を失くしていた時のボクは孤独で……生きてきた。

世界を……恨んでいた。

……いや、多分今も恨んでいる。

何故、自分を異端者にしたのか？ 何故、彼女を代償にしたのか？ 理不尽だらけの世界だ……と。

「ああ……確かに今もこの世界を恨んでいるよ。どうして、こんなに勝手な事ばかり起きるのかって。だけど」

ボクは狂っている目をした男へとはっきり言った。

「それだけじゃない事もボクは知っている……」

「その台詞をカナタが言うのかい？ さっきまで殺気ムキ出しだったのに？」

「……………」

「やっぱり、カナタには光は似合わないよ。君は僕と同じ、殺人鬼だ！」

そう言った直後、ゼルを捕まえていた鎖がだんだんと砕けていく。

そして、その“砕けた”部分がビリビリッと電流でも流れているように、消滅していった。

ボクはゼルから距離を取り、離れる。

そう、彼も異端者の一人。そして、異端能力が発動されたのだ。

「僕は君に闇へと戻ってもらうために、君の光を全部壊す!!」

ゼルはその言葉を言い放つと同時に腰に刺さっていた鞘から、刀を抜き出した。

抜き出した刀には「千明」と刻まれており、太陽の光で美しく輝いていて、普通なら見とれてしまいそうだろう。

その千明をゼルは地面へと突き刺す。ゼルの千明が突き刺さったと同時にボクの体に無数の雷光が迸った。

あちこちでボクの体に異変が起きる。

動く事が……できない!

「僕の“雷電”、久しぶりに食らうとどうだい？ カナタ」

「クソッ……」

どうやら、刀を抜き出した時に刀へと帯電していたようだ  
そして、刀を突き刺したと同時に電流でボクを捉えて、ゼルの自慢  
の電気を流したのだろう。

（落ち着け。そんな事を悠長に考えているところじゃないだろ）

必死で体を動かそうとしても、言う事を聞いてくれない。  
それどころか、ボクの力まで電気で麻痺され、弱まっていくのを感じ  
る。

電気で麻痺したボクにゼルはこっちへと向かってくる。  
そして、前へときて、ボクの顔を寄せる。

「抜け出せないだろ？　そこで大人しくじっと待っていてね」

「何を考えている……？　ボクを倒すなら、今がチャンスなはずだ」

「僕は元々、カナタと殺りあうつもりなんかないって言っただろ？」

「なら、何を」

ボクをそう聞き返す前に、ゼルは答えた。

「これもさっき言ったよね。　ハハッ……君の光を奪うって」

謎めいた事を言い捨て、ゼルは笑いながら、ボクを通り過ぎる。

何が狙いなんだ？

ボクを殺す事じゃなきゃ……。ボクの光を奪うって……。

そう考えてみて、嫌な結論に至ってしまう。  
その考えはまさに悪夢そのものだ。

「まさか！？　」

「ククッ……わかったのかな？　そうだよ。ここにいる人間全員、皆殺しにする」

「お前……！！」

「だって、これしかカナタを奪い返せないし。カナタのためを思っ  
て、僕はやるんだよ」

「やめろっ！！」

「無理な事だな。君にはもう一度闇に還ってもらうためにもね」

ボクの体は千明から発している電流のせいで、口を動かすだけでも精一杯だった。

ふと、脳裏に藍口の顔が浮かんだ。

このままだと彼女もゼルに……。

その先を考えず、思考をとめた。

ゼルの声はだんだんと遠くなって、聞こえてくる。多分、もうアイツはドアの前まで来ているだろう。

どうにかして、ここから抜け出さないと全員が死んでしまう！

「頼む、間に合ってくれ！！」

ボクは必死でこの纏わりつく電気から、必死に逃げ出そうと、もがく。

ゼルが起こそうとする、惨劇を回避するために……。

「方枷君、遅いな」

5時間目には戻るって言ったが、彼は結局その時間帯に戻ってこなかった。

授業の話は頭に入ってなくて、方枷君の事ばかり考えてしまう。また何かあったのかな？

そんな事を考えて心配になってしまう。

別にそこまで心配する必要なんかはないはずなのに。

でも、どうしてだろう？

彼が時々、遠くにいるように感じてしまう……。

あんなにしんどそうな顔をして、体の方に何かあるのか？

それとも、私には言えない事でもあるかのように、何かを隠しているのか？

わからないけど、気になってしまう。

知りたい。もっと、方枷君を知りたい。

「ここ、藍口さん！ 前に出て答えてもらえないかな？」

「えっ？ あ、はい」



私の名前が呼ばれて、思考世界から現実へと戻る。

（考えすぎかな……………）

私は教卓へと向かい、問題の答えを書いて、席へと座った。  
そして、隣に今はいない彼の席を見つめる。  
本当に何所で何をしているのやら……………。

「早く帰って来ないと、約束破りになるぞ……………」

そう呟いた時、廊下の方で何やらざわざわと声がしてきた。

「誰だ？ まだ授業中だぞ！」

先生はそう言つて、注意しようと廊下へと向かう。

先生が扉を開けようとした時、私は嫌な空間に閉じ込められたような感覚がした。

寒気が体中にビリビリと走る。

何だろう……………？

さっきとはまた違った不安でいっぱいになる。

ダメ…、その扉。

開けちゃいけない！！

「先生、ダメっ……！」

気づくと私は、そう叫んでいた。  
だが、数コンマで先生は扉を開けてしまった。

そして

扉を開けた瞬間、先生の体が蒼い光に包まれていく。  
いや、光と言うよりかは電流みたいに見えるが……。

「ギヤアッ！」

いきなり、先生が悲鳴をあげると同時に右足に絡み付いていた電流が消えた。

だが、すぐ後に先生の右足がまた激しく光りだして、消えていく……。

……消える？

……なくなつたの？

「ヒイイイツー!!」

悲痛な叫びをあげながら、先生は床へと転んでしまう。教室内にいた生徒達はそれを見て、パニックに陥った。

「キャアアアアッ!!」

「ア……アアアアアアッ!」

私を含めた生徒達一同は一気に悲鳴をあげてしまう。

右足は膝辺りから消え去っていて、その繋ぎ目からはたっぷりと血が……。

周りにあった机や、その席の生徒達の顔や体にべっとりとついてしまったのだ。

繋がっていた太ももからはたらたらと幾つ物の線が、赤色に染まっ

ていた。

さっきまでの平和だった日常が嘘みたいに壊された光景。  
そのグロテスクな光景に私は目を逸らす。

「あ……ああ……」

私は何が起こったかわからなかった。それは他の人達も同じだろう。  
また、先生に絡んでいた電流が、今度は周りにいた生徒達へと向かっていく。

今度は無数に分かれて、複数のクラスメイト達が包まれた。

「ウワァッ！」

「ウウ……」

「ギャッ！」

電流に絡まれた生徒達はさっきと同じように、腕や足などを消されていく。頭が消滅して、死んでしまった子もいた。

何……これ……？

全部……嘘だよ……。。

今起こっている出来事が全部悪い夢だと思った。  
だけど、頬についた血からは生ぬるい温かさが伝わってきて、それが現実だと私の希望を覆してしまう。  
残った生徒は私を含めて……4、5人。  
あっという間にだった。  
クラスは謎のモノに壊滅されているのだ。

いつの間にか無数の電流は、一つに集まって、形を変化させていく。  
そして、その電流は人の形を整えた。  
蒼に包まれたその形はだんだんと人の肌色へと変わっていく。  
そこから現れたのは、一人の少年。見たところ、年齢は私と一緒にの  
ように思える。  
少年は口を開く。

「あつけないな。」      ただの人間は本当にツマラナイ……」

そう言つて、手を私達の方へと向けてきた。  
その手からは、さっきの電流が放たれて、私以外に残っていた生徒  
達が捕らえられてしまう。

「クズ達は処理しなきゃ！」

そう、微笑んで、少年は開いていた手をギュッと握り締める。

「ガアアアア！」

私の隣にいた男子生徒が叫びながら、お腹を押さえる。

その押さえていた腹の部分がいきなり膨れ上がり、今度は消滅とは違って、破裂を起こした。

私のその破裂して飛び散った男子生徒の血をともに全身へと浴びてしまう。

それに呆然と見ていた時に、残っていた生徒達が、さっきの男子生徒と同じく次々に腹部を破裂して、臓器等が大量にあふれ出てくる。気持ち悪い、グロテスク等の言葉では現状を言い表す事ができなかった。

「い……や………」

私は血だらけになった体を、震わせて、体を床に落とす。

「あれ？ 君、運がいいね！ まだ生き残っているなんて」

「あ……あ……来ないで………」

「でも、これもカナタのためだから、……死んでね」

「……力……ナタ？」

方枷君の名前を聞いて……、私は後悔をしてしまう。

これから死ぬんだ、私……。

なら、もっと彼に優しくすべきだった…。

もつと見つめたかった。

そして、方枷君に気持ちを…。

「好き」という私の気持ちを伝えなかった。

『サ・ヨ・ナ・ラ』

そう、少年が呟いた後、電流が一直線へと私の方へと向かった。  
それを見て、私は目を瞑る。

最後にもう一度だけ……。

方枷君の顔、見たかったな……。

そう思って、覚悟を決めた時、私は誰かに抱きかかえられていた。  
目を開けると……。

そこには、大好きな彼の顔が心配そうに私を見つめていた。

「おい、藍口！　しっかりしてくれ！　藍口！！」

幻でもいい……。。

方枷君の顔を見る事ができて、十分だ……。

もう、上手く精神が保てない私は氣を失っていく。

途切れていく意識の中で、方枷君が私の名前を必死で呼び続けているのが、まだ聞こえてきた。



e p 6 狂宴＜後編＞（後書き）

最近、投稿のスピードが遅くなってきましたね。（読者の方々、申し訳ないwww）

桃月も、最近は大変なものでw（嘘つけw！

で、後編を書きましたが……。

えーと、むごいですねwはいw

碧ちゃん可哀想すぎますね（汗）

（・A、）……。

ていうか設定がだんだんと難しくなり（+ややこしくなってきたw）、書くのも少しきついですが、頑張っていかなきゃね。

読者さんを裏切らないためにも必死にこいて小説を書く桃月さんでしたww（うえ

では、次回のあとがきで会いましょう

ゞ（\*。^\*）ノ see you next time !!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7903b/>

---

誓約異端

2010年10月17日05時51分発行